今月のお題

オンラインで宇宙の果てまで

オンライン講演花盛りの中、国立天文台三鷹の年に1度の特別公開もオンライン開催になりました。暗中模索・試行錯誤の先に、新しい風景が垣間見えました。

高梨直紘（東京大学）／平松正顕（国立天文台）

オンライン特別公開で「星と惑星の時間」の案内役を務めた平松。（Credit: 国立天文台）

新型コロナウイルスの広がりが収まりを見せないなか、毎年10月恒例の国立天文台・東大天文センター・アストロバイオロジーセンターの特別公開「三鷹・星と宇宙の日」が開催されました。例年であれば3000人～5000人が押し寄せ、どこの展示エリアも来場者と研究者や技術者が近い距離で言葉を交わし、熱気でムンムン。はい、今年はまったく許されない環境です。ということでご多分に漏れず、三鷹・星と宇宙の日2020はオンライン開催になりました。

筆者（平松）は特別公開運営委員を務めているので、プランニングの最初から関わることができました。せっかくだから、オンラインだからこそのことをやりたい。普段の特別公開では、展示エリアがプロジェクトごとに分散していて、お互いのつながりが把握しにくかったのです。「モデルコース」を設定して、これに沿って展示を回るとストーリーが見えてくるような工夫もしてみましたが、なかなか難しい。今回は、朝から夕方までのまる1日のオンライン番組で、太陽から始まって宇宙の果てまで旅しながら、色々な宇宙の謎を紹介しつつそこに挑む国立天文台ほかの研究者や研究施設を紹介する、というシナリオを作ることにしました。

ところが、そんな長丁場の番組を国立天文台のスタッフだけで作るのは不可能。ということで、山岡均広報室長が出演するテレビ朝日系「超人女子戦士ガリベンガーV」製作陣の協力を得ることになりました。オンライン開催で普段三鷹にお越しになれないたくさんの方にもご覧いただくために、放送作家さんにも入っていただいてわかりやすさととっつきやすさに重点を置いた台本になりました。当日はMCとして一日中出演してくださった大西洋平アナウンサーも、番組に不慣れな研究者から言葉を引き出したりネットを通じて寄せられるコメントをひろったりと、「さすがプロ」とうなるほどの手際で生放送を仕切ってくださいました。ディレクターさんが天文台の各所を訪問してスタッフにインタビューする「天文台探訪」の録画映像も人気でした。そして結果的に、従来の三鷹への来場者より1桁多い方に見ていただくことができました。なにぶん初めてのことで、台本の修正が追い付いていなかったり、ネット越しに寄せられる質問を充分に拾えなかったりと反省点も多いのですが、それでも新しい特別公開の形を試してみる機会になりました。果たして来年はどうなるか。コロナの早期収束を願います。